『群像』第64巻6号、2009年6月、pp.140-141.

随筆

ベルリンの壁を遠く離れて

今橋映子

今年の東京は三月後半に寒さが続いて、桜の開花が遅れ、四月入学式の大学キャンパスでは、時合わせるかのように花吹雪が舞って美しい。大学一年生のフランス語の授業を毎年受け持っている関係上、とにかく張り切っている新入生を迎えるのは、やはり心愉しい季節である。が、この四月、はっと気づいたことがある。二〇〇九年といえば、ベルリンの壁崩壊から二十年ではないか――いよいよ「その後」に生まれてきた世代にフランス語を教える、という時代に至ったということである。

一九八九年十一月、ベルリンの壁が崩壊した時、私はパリに留学していた。偶然ながら、その同じ壁が築かれた一九六一年に生まれた自分が、院生としてここに留学するまで生きてきたのと同じ時間、あの壁が東西を隔てていたのだ――という事実。何か茫然としながら、刻々と映し出されるテレビ画面に釘付けになっていたことを、よく思い出す。

ルーマニア・チャウシェスク政権の崩壊も、同年の十二月だった。私が住んでいた小さなアパルトマンは、パリ七区、エッフェル塔まで歩いて三分――という場所で、本来は高級住宅街で知られる地区だが、地元の人々が「七区の中の村」と称するとおり、商店街が集まる庶民的な一角。同じ狭い通りには、偶然にもルーマニア大使館があった。クリスマスの日、チャウシェスク前大統領夫妻が銃殺刑に処せられた直後、パリのルーマニア大使館では、（共産党政権を意味する）中央の国章を、丸く切り抜いた国旗が早々と掲げられ、それまでほとんど開かれることのなかった窓や扉が開いたことに、私たち住人は驚いた。私の家主の娘さんも「あそこから子供の声が聞こえるなんて！」と、感慨深げである。それからしばらくは、在仏ルーマニア人たちの帰国ビザの発給を求めるデモの声が、年末の寒空に響いていた。ベルリンとはこんなに離れていても、確かに時代の波は動いている――それが実感できた一九八九年だったのだ。

あれから二十年。大学人となってパリに行くこともままならなくなった私は、その後一ヵ月以上滞在できたのは、二、三回に過ぎないが、少ない回数だからこそ、変化が観察できたという（勝手ながらの）言い分もある。

とりわけ昨年十月の滞在では、それを実感できた。幸いにも二十年前の留学時とほとんど同じ地区に、短期アパルトマンを借りることができたからだ。ご近所のスーパーマーケットの位置まで、予め知っているという安心感。その閉店時間を、今や東京の自宅のインターネットでチェックしてから飛行機に乗る、という時代がやってきている。

だが、インターネット検索サイトがどんなに「ストリートビュー」なる機能を充実させようとも、暮らしの一齣をそこに映し出すことは決して出来ないだろう。同じ街、同じ通りの「二十年」は、やはり決して短くはない時の流れであった。何よりもこの間に、欧州連合が発足（一九九三年）し、良くも悪くもグローバリゼーションの空気が浸みわたってきた影響が、フランス社会にとっては大きい。例えば、フランス人の英語に対するアレルギーが明らかに減少し、店でも街でも観光客は楽になった。私が以前住んでいた狭い通りにも一軒、お子様向け英語塾がしっかり出現していた。例のルーマニア大使館はといえば、通用門の辺りに「ルーマニア文化協会」なる看板を掲げて、一般人向けの教養セミナーなどを開講している。誰も一歩たりとも入れなかったあの時代を知っている者にとっては、本当に夢のような光景である。七区の住人たちを観察していると、昔ほど、子供や犬に厳しく叱りつけることがないのも意外で、ドラッグストアの中で、待ち時間を我慢できない犬を、後ろに並んでいる人があやしている。秋の夕陽がまだ差し込む、のんびりした夕食前の商店街――。

一方で、二十年来全く「変わらない」お店を次々確認できるのも楽しい。いつ客が来るかと思うほどひっそりしている靴修理の店、中華総菜の店、アップルパイが美味しいパン屋、そしてイタリア人経営のハム屋さん――天井から所狭しとぶら下げられた塊状の生ハムやサラミの林の下に、パテや魚の総菜が山のように盛られている。これぞヨーロッパという懐かしい匂いと、店内に充満するおしゃべり、正午から三時近くまで昼休み、という今やEU時代に廃れつつある習慣も、この店では健在のようだ。

もちろん日常レベルのこんな観察が、ベルリンの壁崩壊後二十年間のフランスの現実を、そのまま指し示している、と思っているわけではない。七区の現在の賑やかさは、とりわけ不動産屋が多数あることからも分かる一種の投資ブームに連動しているのであろうし、実際、昨年十月、まさに私の滞在中に起こった世界同時不況という新しい事態を受けて、急激にまた変化が訪れるだろう。一九八〇年代以降多数流入した外国人たちの労働環境、および彼らの住むパリ「郊外」の居住環境の劣悪さは、「七区の中の村」からは決して窺うことができない、れっきとしたもう一つの「現実」なのである。

パリから帰る前日、留学時代にマットレスを買った近所のお店に、テーブルセンターや小物などのお土産を買おうと思って立ち寄った。二十年来変わらない店内。店番をするマダムに「実は私、二十年前に……」と思わず切り出した。「まあ！　学生さんだった方が、今度はお仕事でここにいらっしゃるとは……あれから二十年経ったんですね、私たち夫婦の二十年間は……」と、お釣りを渡してくれるのを忘れるほど、ひとり感慨にふけっていた。

確かに時は人間を置き去りにして、滔滔と流れるがごとしだ。「ポスト・ベルリンの壁」世代に、私たちは何を語っていけばよいのだろうか？　変化する価値と、永遠の価値のあり方――一見不変に見えるパリの街ですら、その双方が存在することを、語っていけばよいだろうか。